

「やまと絵のこころ」展によせて

為恭作品の魅力

— 「足柄山図」(奈良県立美術館蔵)を中心に—

2023年は、岡田為恭(1823~64)の生誕200年に当たる年でした。「やまと絵のこころ」展ではこれを記念して、大和文華館所蔵の為恭作品4件を展示します。為恭は幕末期に活動した絵師で、平安や鎌倉の古い絵画を熱心に学び、再興を図った「復古やまと絵派」の絵師として知られています。当館所蔵作品のうち、「伊勢物語八橋図」(「展観のお知らせ」参照)と「春秋鷹狩茸狩図屏風」(図1)の二件は、濃彩で平安時代の人々を描き出した作品です。

今回お借りするなかに「足柄山図」(図2、奈良県立美術館蔵、1月30日(火)から展示)と呼ばれる作品があり、これも濃彩を用いて平安時代後期の逸話を描きます。雅楽で著名な家の出である豊原時秋は幼いころに父を亡くし、秘曲を授かることができませんでした。合戦の際に時秋は、父の弟子であった源義光が京

から戦へ向かうのに随行し、危険であるため帰るよに言われても供を続けました。足柄山まで来たときに、義光は時秋の真意を悟って、笙の秘曲を時秋に伝授したという内容で『古今著聞集』に収録されています。

「足柄山図」では、画面中央で義光が笙を吹き、「古今著聞集」の文章どおり縹色の狩衣を着た時秋が左手にもった譜面を見ながら右手で拍子をとっています。二人のいる場所は高い崖の上であることが、墨線で表わされた崖縁や、手前に描かれた木々の梢からわかります。また、画面向かって左上には遠くの山並みを小さく描き込み、画面に奥行を与えています。同様の主題を縦長の画面に描いた為恭作品はいくつか知られていますが、奈良県立美術館所蔵の作品は横に長い画面を用いた点が注目されます。

国学者の西田直養(1793~1865)は

『笈舎漫筆』に、為恭が「見て腹に入れた」という80を超える数の絵巻物を列挙しています。横長の「足柄山図」も「伊勢物語八橋図」も、横方向に展開していく絵巻物への愛着をもとに制作されたと推測されます。「足柄山図」で崖の突端の側面に見られる柔らかい皴法や、墨で描いた枝の上から緑青を塗って葉を表した樹木などは古絵巻に頻出する表現です。また、崖から奥へと広がる雄大な空間感覚は、護法童子がはるばると飛んでくる広い野山を描いた「信貴山縁起絵巻」(図3)のような古絵巻にも通じるのではないのでしょうか。

為恭がどのように古絵巻を模写していたのか実際にうかがえるのが、「粉河寺縁起摸本」(図4、個人蔵)と「善教房絵詞摸本」(大和文華館蔵)です。前者の原本(図5、粉河寺蔵)は、和歌山県の粉河寺の本尊である千手観音像の造像譚と、観音の靈験譚を記した絵巻物です。摸本では、原本に見られる損傷の跡もそのまま写しており、非常に忠実な復元模写です。奥書や為恭の署名はありませんが、箱蓋の「冷泉三郎筆也」という墨書に加え、巧みな筆さばきと丁寧な彩色による完成度の高さから為恭と見なされています。また、「善教房絵詞摸本」は、彩色を行わない白描絵巻の原本(サントリー美術館蔵)を写した作品です。

『笈舎漫筆』に列挙された絵巻物の一覧には、「真本」は為恭が見たのと別の家に保管されているといった記述が散見され、原本ではなく摸本から学習することも多かったようです。原本であるかどうかや彩色の有無にかかわらず、古い時代の要素を伝える作品であれば貪欲に

接していたのでしょう。

熱心に古画を模写し、古画に関する情報を蓄えることは為恭以前にも行われていました。田中訥言(1767~1823)はそのひとりです。訥言は尾張に生まれ、石田幽汀(1721~86)に狩野派の技法を学んだのち、土佐光貞(1738~1806)にやまと絵を学んだといひます。訥言は様々な古画を模写する機会も得て、「伴大納言絵巻」(出光美術館蔵)や「佐竹本三十六歌仙絵」(諸家分蔵)などを模写しました。訥言による「伴大納言絵巻摸本」(関東大震災で焼失)は、為恭が父親に懇願して入手したという逸話で知られています。訥言の没年は為恭の生年と重なっているため、2023年は訥言の没後200年でもありました。今回の展覧会では、為恭の画風にも通じる鮮やかな絵具で彩色された訥言作品を展示します。

為恭は古画の表現を学びながら、自身の制作に活かしていました。一方で、「足柄山図」の場合、手前と遠景の木々の大きさに歴然と差をつけて遠近感を表すなど、合理的な感覚も見られます。古画の単なる模倣に終わらせることなく、新たな時代の感覚を加味した表現の行われている点が為恭作品の魅力です。展覧会では、「足柄山図」などの為恭作品において、古画の伝統と江戸時代後期の合理的感性とが画面内に共存している様子も楽しんでいただければ幸いです。(仁方越洪輝)
※図3は『日本絵巻大成4』(中央公論社、1977)、図5は『国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史』展図録(和歌山県立博物館、2020)から転載しました。



図1 春秋鷹狩茸狩図屏風(左隻)



図2 足柄山図



図3 信貴山縁起絵巻(部分)



図4 粉河寺縁起摸本(部分)

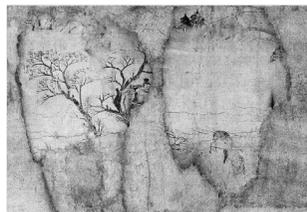


図5 粉河寺縁起(部分)